田村志津枝さん コラム

PICK UP MOVIE

『山女』

8/11～

［2022年／日本・アメリカ／98分］
出演：山田杏奈、森山未來、二ノ宮隆太郎
　　三浦透子、永瀬正敏
監督：福永壮志
脚本：福永壮志、長田育恵

©YAMAONNA FILM COMMITTEE

聖と賤
人間らしく生きるとは

18世紀後半、人々が霊界と交流しながら暮らしていたころの話だ。東北地方では冷害が続いていた。飢餓による死者が出る。子供は生まれるとすぐに、食い扶持を増やせないからと殺められる。それらの死体処理を引き受けている一家があった。先代が火事を起こしたために田畑を取り上げられ、賤民として暮らさざるを得なかったのだ。

極限状態に置かれた時こそ人間の本性が出る、とはよく言われることだ。日照時間がとても短く作物も実らない寒い夏、村では何が起きたのか。

ひもじさに耐えかねて一家の父親が盗みを働いた。父親が捕らえられた時、娘の凛は咄嗟に父をかばい自ら罪をかぶった。何故だろうか。村全体から蔑まれ、食糧の分け前も少ないこの家族の中でなお、父親は息子を重んじ、凛は食事さえできずにいたというのに。罪人となった凛は山奥へと逃れ、伝説の山男に出会う。村での蔑視や抑圧から解放されて、凛は山男と共に心穏やかな日々を過ごすようになった。

ところが村長らはマタギを雇い、凛を連れ戻すことに決めた。冷害が収まらず窮地に立たされた村で、お日様に出てきてもらうには若い娘を生贄として神に捧げるしかないと、巫女が言い出したのだ。無理やり連れ戻された凛は、積まれた薪の上に白装束で立たされる。薪に火が放たれて凛が炎で包まれようとしたとき、いったい何が起きただろうか。

この結末の部分をどう読み解くかが、作品の要になる。古来、そして今でも、女たちは何かと献身や自己犠牲を求められている。だが世間は自己犠牲を称えつつ、そこからの利益収奪を図るのだ。自己犠牲と引き換えに付与される聖性など、今や女たちは辟易している。家族の犠牲になり、村の犠牲になることを強いられた白装束の凛。彼女はどこへ向かおうとしているのか。

この映画は柳田国男の「遠野物語」に着想を得たという。民俗学の業績を活かした暮らしの細部の確かな描写、それに東北の自然を鮮やかに捉えた映像によって、この作品は人々の感情や自然との交わりを深く物語ることに成功している。苛酷で美しい自然と対峙して人間らしく生きるとは何かを、切々と訴えかけてくる。

プロフィール
田村志津枝：ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた　1977年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオシェンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。